

85 モーイ親方(イ)

(勉強・煙草は一回・嫁取り・薩摩の難題)

モーイ親方は偉い人でね。モーイ親方は頭は偉いが、人にはフラフージ(馬鹿なふり)してよ、人望がないように見せて、いつも蛙を取ってよ。生徒がみんな集まらないうちに学校へ行つて先生から勉強を習つてからに。また、生徒が来る時から蛙を取っていたつて。

そしてまた、勉強はよくしたよ。人には見えないように。勉強していると見せないようにね。知恵者ではあるから親がもう分からないでよ。

煙草を吹いたら、

「子どもはそんなに煙草を吸わないで」と言うからよ、
「どんなして吸わにゃいかんか」つて言うたら、

「煙草吸うなら一回で吸いなさい」と言つたから、煙管大きく作つてよ、それに煙草たくさん詰めて、これを吸うたらもう煙がしたからよ、こつちの村は火事と思つてよ、

「火事だぞ」と。その村にいる人があれしてみると、

煙草吸うておつて。

「なんでこんなしたか」と問うたら、

「お父さんが一回で吸いなさいと言うから、一回で済ますから」と言うて。

それからその、また、いいなづけの奥さん、大変きれいかった。この奥さんはもう外には出なかった。またこの友達がよ、

「あんたの奥さんを見せるならね、あんたの言うこと聞くから」と言ったら、

「そんじゃあ見せようね」と言うて雄鳥を取ってきて。そして雄鳥をこつち放したらよ、この紡いでいる女のところへ行つて。この鳥は逃げて行つてから。そしてあの、紡ぎおる籠よ、あれをひっくり返して。奥さんはその鳥追うために外に出たからよ、みんな見ておつたよ。

このことを残念がつて、娘は。親に、

「こんなことをすると、これはもうなかつたことにしてくれ」と言ったら、親はまた、娘の親がよ、

「これ、断わろうねえ」と言つて断りに行つて。行つたらよ、またこのモーイはよ、魚釣るあれをね、肩に

掛けて引つ張つてからね。これ、なかなか抜けないでしょう、魚釣るもんだから。そして、

「約束していたものが外れるか」と言つてよ、紐で肩を引つ張つてから。またこれにも、

「ぼくの言うこと聞いたたら外すから」と言ったらよ、

「外したら何でも聞く」と言つたからよ、

「じゃあ、娘の縁談は、妻にさせるか」と言つたらよ、もう仕方がないから、またこれも負けたて。負けてまた妻にして。

そしてから、薩摩から首里へ、

「運玉森と雄鳥の卵、また、灰の縄、三つ持つて来なさい」と薩摩から来たから。首里の役人たちも心配したから、モーイ親方のところへ行つて、お父さんに、「このことをどうするか」と言うてよ、みんな相談したら、もうみんな心配して。灰の縄もできないと思つていよう。また、雄鳥が卵を産むこともないでしよう。みんなこれ、難しい難題。またこれも、モーイは聞いてるからね。

「この問題はぼくに任せてくれ」。親はもう、

「あんたができることじゃないけど、言い出したら出

来るかもわからんから行かすことにしよう」と。あれから、モーイが行つた。薩摩に。

行つたらまた、あつちの王様がまた、

「何でお父さんが来ないであんたが来たか」と言つたらよ、

「お父さんはお産すると言つてよ、もう来られなかったからぼく来た」と。

「男が子を産むか」と言ったら、

「雄鳥が卵を産むか」と言つて、またこれ、返してよ。また、

「灰の縄持つて来たか」と言うたらよ、

「持つて来た」と言つて、こつちまた、縄を焼いて見せたからよ、大変なことでしょう。これ見せたから、

「灰の縄、ちゃんとあります」と、あげたからよ、またこれも通つてるでしょう。

また、

「運玉森という、あれ、持つて来たか」と言つたらよ、崩してはあるけれども、載せる船がないから、沖縄には船はないから、薩摩から船を、持つてくる船を貸してくれ」と言つたらよ、ありやあ、あつちもできな

いでしょう。だから、これも負けて。

三問であれしたから、あつちの王様は、

「琉球にそんな知恵者がいたか」と言つてね、

「あんたの望みを叶わすから、何でもいいからあんた言いなさい。上げるから」と言つて約束したから。また、モーイ親方は、

「じゃ、一日でもいいから薩摩の王様をしてみたいから」と言つたらよ、

「やつてくれ」と。王様になつて。あつちの家来たちは王様を怒つたからよ、また王様は、自分が話したからよ、

「話したもんだから仕方がない」と言つてよ、王様がそう言つたらよ、

「沖縄からの証書みんな持つてこい」と言つて出させて。それから、それ取つてからね、琉球からの税金を納めるものみんな引つ切つて。もう、あつちの王様も家来たちも、頭があれして、

「こんな知恵者があつたか」と言つて。

琉球はまた、舞踊の国だから、音楽もやつて。また、古典もあれして、琴持つてきて弾かせていたが。弾く

時、夢中に弾いているところにまた、二人の家来が殺そうとしたからよ。それでまた、その二人の家来を押えてね、

「こんなこと何か」と言つてよ、言つたから、あつちはびっくりしてよ。

「夢中にやつてるが、後ろから分かるなあ」と言つて、「こんな偉い人にはもう何もできない」と言つてよ。

琉球はモーイ親方に助けられたと。あれまではいじめられる一方だった。それがな、モーイ親方の知恵さ。

字豊原 国吉マツ